

文豪 徳富蘆花も見た九十九里浜の変形太陽

鈴木建人^{1),2)*}・大木淳一³⁾・山口友樹²⁾

¹⁾千葉県立中央博物館 市民研究員

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

²⁾千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課

〒260-8667 千葉市中央区市場町 1-1

³⁾国立歴史民俗博物館博物館事業課

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117

*E-mail: k.szk529@pref.chiba.lg.jp

(2025年10月31日投稿；12月15日改訂；12月19日受理)

要旨 1917年夏、文豪 徳富蘆花は千葉県九十九里町粟生でひと月を過ごした。そして翌年に発表した随筆「九十九里」において、九十九里の海で「市女笠」の形をした日の出を見たと言っている。筆者はこれを九十九里浜で観測される変形太陽であると考え、当時の蘆花の日記からより詳細な記述を発見した。日記の記述と上位蜃気楼による変形太陽の観測結果を比較したところ矛盾なく合致し、蘆花が目撃した日の出は上位蜃気楼である蓋然性が高いことを示した。

キーワード：上位蜃気楼、変形太陽、光学現象、徳富蘆花、中西月華、九十九里浜

蜃気楼とは、光が空気の温度（密度）の変化する層を通過することで曲がり、遠方の景色が変形して見える光学現象のことで、大きく分けると遠方の景色が上方に変形して見える「上位蜃気楼」と下方に変形して見える「下位蜃気楼」に分類される。上位蜃気楼が発生している時、空気の温度は上が暖かく下が冷たい「上暖下冷」の逆転層になっている。上位蜃気楼は比較的珍しい現象で、国内で観測できる地点は少ない上、その観測時期は春季（3～6月）が多い（日本蜃気楼協議会 2016）。

ところが、千葉県九十九里浜で観測される上位蜃気楼は、2015年以降の筆者らによる調査によって年間50日以上、春季だけでなく夏季（7～8月）、冬季（12月）にも観測できることが明らかとなり（大木 2019、大木・武田 2018 など）、全国でも珍しい上位蜃気楼観察の好適地として知名度を増している（朝日新聞 2018）。

九十九里浜での上位蜃気楼の初観測記録は、物理学者・随筆家の寺田寅彦による 1911（明治 42）年 6 月 21 日のスケッチである（富山県伏木測候所 1919）。これ以降、2015 年の再観測まで上位蜃気楼を観測したスケッチや文章などの記録は見つかっていなかったが、1917（大正 6）年夏、近代の文豪 徳富蘆花が九十九里浜滞在中に上位蜃気楼である変形太陽を目にして記したと思われる文章を見出したため、報告する。

徳富蘆花と九十九里、中西月華

徳富蘆花（本名：健次郎）は明治から昭和初期にかけて活躍した小説家・随筆家で、ジャーナリスト・思想家の徳富蘇峰の弟としても知られる。1917 年当時、蘆花は代表作となる小説『不如帰』や『みづのたはこと』などの作品が評価され、文筆家としての地位を確立して

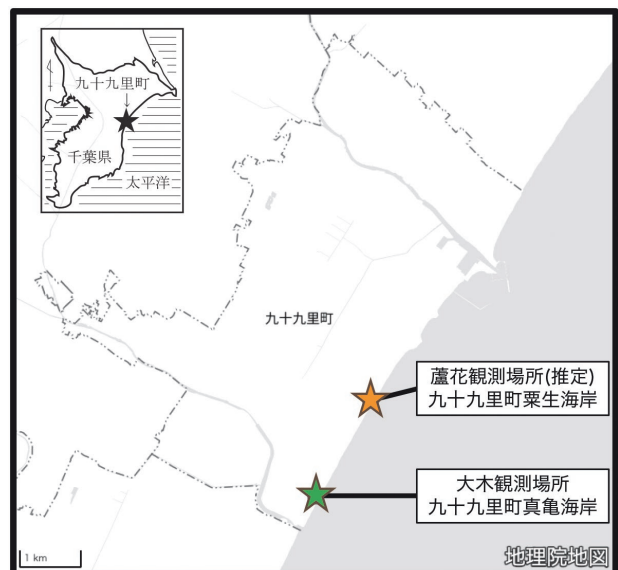


図 1. 徳富蘆花の推定観測場所と大木観測場所。（国土地理院地図を筆者加工）



図2. 中西月華が撮影した徳富蘆花と茉莉舎の記念絵葉書. (「九十九里 粟生中西別荘茉莉の舎にて徳富蘆花先生」千葉県立中央博物館所蔵)

いた。一方で、父の死などをきっかけに人付き合いを避けた半隠遁生活にあり、こうした閉塞感を打破するために、蘆花自身の言によれば「禊」を目的として九十九里の海を目指し、1917年7月1日から8月1日までのひと月を山武郡豊海村粟生（現 山武郡九十九里町粟生）の海辺で過ごした（図1）。

その頃の九十九里は、1910（明治43）年に無料休憩所を開設した片貝海岸が、当地域初の本格的な海水浴場として賑わいを見せていた。この休憩所を設置したのは九十九里の青年文化運動団体「向上会」で、その中心人物の一人が中西月華である（齋藤1993）。

中西月華（本名：忠吉）は、九十九里片貝村にあった中西薬局の店主・薬剤師、また当地きっての名士として知られ、俳句や絵画・写真撮影に親しんだ趣味人であった。特に撮影の腕は巧みで、九十九里の風景を写した写真帖やポストカードを「中西薬局」等の名義で発行している（図2）。

月華の交流は広く、内村鑑三・坪内逍遙・会津八一・香取秀真・徳富蘇峰など多くの文化人と書簡を交わし、時には講師として向上会主催の講演会に招いたり、自宅「月華園」に滞在させたりしている（毎日新聞千葉支局1973、齋藤1993）。

徳富蘆花との繋がりは、蘆花作品の愛読者であった月華が蘆花へ手紙を出したところから書信の往復が始まり、月華が蘆花邸を訪うまでになった。初めて家を訪問した際は、蘆花から「九十九里にも行ってみたい」と言われたといい（中西1936）、実際蘆花が九十九里行きを

決めた際に連絡し、逗留場所の手配を頼ったのは月華であった（徳富1930）。月華の存在が、蘆花の九十九里滞在を後押ししたことは間違いない。

変形太陽の記述

徳富蘆花は豊海村粟生で過ごした1917年の一夏を、翌年発行の随筆『新春』内の作品「九十九里」で回想している（徳富1918）。滞在中は粟生海岸での海水浴と散歩を日課としており、晴れた日には宿泊場所である前村長の家から海岸近くに建つ中西月華の別荘「茉莉舎（まりのや）」（図2）まで移動し、日の出前と昼過ぎの2度海に入っていた。その際に見た日の出の様子を、「九十九里」では次のように記している。

大抵は日輪様より私が早かつた。海にざぶざぶやつて居る中に日が出ることもある。上つてから出ることもありました。大抵は水平線に横雲がかゝり、水から直ぐに日の生るゝを見たことはありませんでした。鳴浜村の小学校長押鐘さんの話によれば、四年間日の出を見るが、完全の日の出は滅多にないとのことでした。私の一月の経験ではもとより然でありました。大抵雲がありました。ある時は市女笠の容（なり）をして日が出ました。ある時は靄（もや）があつて、ぼんやりと真鍮色に日が出ました。

（下線部は筆者による）

市女笠とは平安時代以降に用いられた編笠の一種で



図3. 市女笠を被った人物図. [鈴木久治 写『一遍聖繪』(国立国会図書館デジタルコレクション)を筆者加工]

(図3)、広いつばと中央頂部の中子(こじ)形を特徴とする(鈴木1995)。

中子形が突き出した「市女笠の容」は太陽の形の表現としては奇妙であり、何らかの要因によって変形した太陽を見たと考えられるが、「九十九里」にはこれ以上の記述はない。だが蘆花は当該期間の日記を残しており(徳富1986)、ここから市女笠太陽の観測日と、時間経過により変形していく太陽の様子を克明に知ることができた。

○七月九日(月) 晴 風冷

日の出ぬ内にと急ぎ浜に出る。有明月は西にかゝり、東は日出前の明るく、秋暁の様な気が海陸に満ちて居る。(中略)

細君が来た。共に日の出を見る。最初水平線上の雲に一線の朱がある。やがて其上にまた短かい朱線が出来る。上のが漸次拡大して、丁度市女笠の形になる。やがていびつのゆらゆらした大きな日が出る。渚に金が流れる。

ここから、蘆花が市女笠の日の出を目撃したのは1917年7月9日であること、太陽は見ている間に形を変え続けていたことが分かる。また変化の様子は大きく分けると次の四段階となる。

- ① 最初水平線上の雲に一線の朱がある
- ② やがて其上にまた短い朱線が出来る
- ③ 上のが漸次拡大して丁度市女笠の形になる
- ④ やがていびつのゆらゆらした大きな日が出る

次に、蘆花が記した太陽の四段階の変化と、筆者が観測した上位蜃気楼によって変形する太陽の様子とを、写真とともに比較する。

観測結果との比較検討

筆者のうち大木は2015年以降、九十九里町真亀海岸において蜃気楼の観測を目的とした日の出の観測を続けている。蘆花が変形太陽を観測したと思われる九十九里町粟生海岸から筆者の観測地点までは2 km以内と近く(図1)、太平洋から昇る太陽の見え方はほぼ同じと考えられる。

また上位蜃気楼によって起きる太陽の変形は様々だが、蘆花の記述に類似した経過を辿って「市女笠」と呼べる形に変化した太陽を複数回観測・撮影している。蘆花が変形太陽を目撃した7月9日に近い夏季の5事例を、日記の記述に沿ってまとめたものが表1である。以下、表1に沿って蘆花の見た変形太陽を考察する。

表1. 徳富蘆花の記述と九十九里町真亀海岸で観測した変形太陽の比較。

	2015年8月6日	2021年7月20日	2023年7月30日	2023年8月2日	2025年6月29日
①最初水平線上の雲に一線の朱がある					
②やがて其上にまた短い朱線が出来る					
③上のが漸次拡大して丁度市女笠の形になる					
④やがていびつのゆらゆらした大きな日が出る					

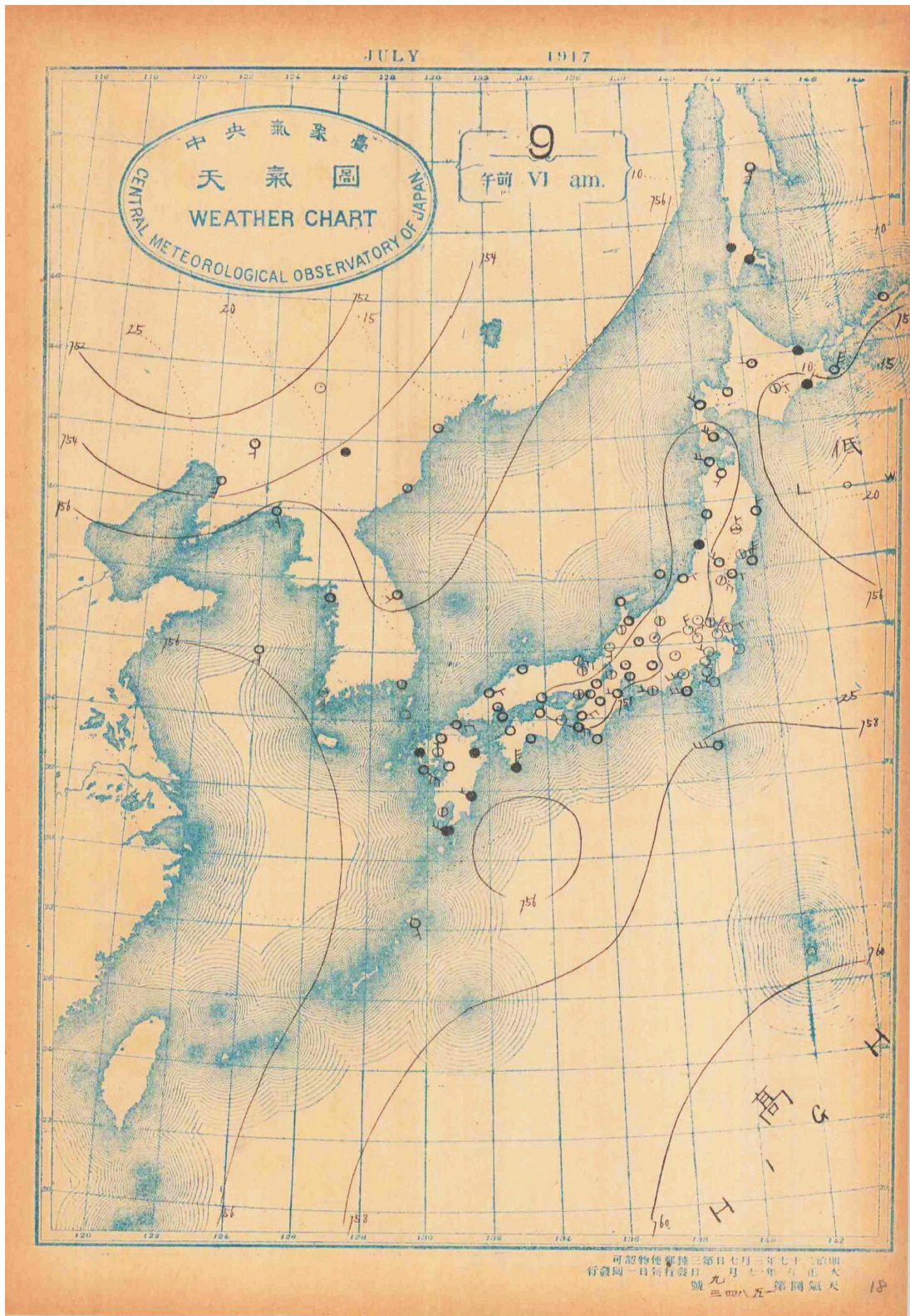


図4. 大正6年7月9日午前6時の中央気象台気象図。(国立国会図書館デジタルコレクション)

①筆者は蘆花と同様に、水平線上に線状に現れる太陽を観測している。ただし、「一線の朱」は2023年7月30日のように直線的なものもあれば、他4例のようにやや厚みのある線状のものもあった。また蘆花が「水平線上の雲に」としているのは、2023年8月2日や2025年6月29日のように空に薄雲がかかっていたか、或いは線状の太陽を雲に映った太陽光と誤認したなど、肉眼による影響で詳細を観察できなかった可能性がある。

②2023年7月30日や同年8月2日のように、水平線上に現れた線状太陽の直上に短い線状の太陽が見ることがあり、蘆花の記述と同様の現象が確認できる。また、2015年8月6日のように線状太陽が膨らみ始めた後、その直上に短い線状太陽が現れるパターンや、2021年7月20日のようにグリーンフラッシュとともに直上の短い線状太陽が下方に伸びて水平線上の太陽と合わさる等、様々な変化パターンを見出している。

③上下の線状太陽が膨らんで一つに合わさると、市女笠のような形となる。示した例では椀を伏せたような形と鍋蓋のように浅いものがあるが、市女笠はどちらにも似た形状があるため、蘆花がどちらを見て市女笠と形容したのか詳細は不明である。筆者の観測では、ここから帽子状、あるいは四角い太陽に変化するパターンもあった。

④太陽が水平線を離れながら海上にある複数の逆転層を通過することで、太陽の側面は波線のように揺らぎ、やがて下部のゆらゆらとしたキノコ状に変形していく。蘆花も同様の「ゆらゆら」を観測したと考えられる。

以上のように、徳富蘆花の日記の記述は筆者が観測した変形太陽の時間経過による変化の様子と合致し、上位蜃気楼による変形太陽を目撃した記録である蓋然性が極めて高い。

1917年7月9日の気象条件

当時の九十九里粟生の正確な気象記録はないが、中央気象台の気象図(図4)と銚子観測所の記録(表2)を参考として示した。

また蘆花は散歩に寒暖計(温度計)を持参して気温や海水温・砂中温などを気ままに計測し、日記に記録していた。日記によれば、前日8日は久々の晴天で87°F(約30.5°C)を記録。海水も温かくなっていたが、強い南風が吹いていた。9日は快晴であったが「風冷」「秋暁の様な気が海陸に満ちて居る」「秋の様に冷やか」と評しているとおおり、日中の気温は前日より約10°Fも低かった(約25°C)。銚子の観測記録と比較すると、蘆花が記録した九十九里粟生の気温の方が高いようだが、その他の天候の記述は矛盾がなく信頼できると思われる。

これらの条件から推測すると、前日の晴天によって温まった空気の下に、北風に変化する際に冷たい空気が流れ込んだことで上暖下冷の空気層ができ、上位蜃気楼が発生した可能性があるが、詳細は不明である。

表2. 1917年7月8-10日の銚子の天気。
[中央気象台気象図及び気象庁ホームページを参照し作成]

年月日	時刻	天気	風向	風速(mps)	気温(°C)
1917年7月8日	6:00	晴	南南西	10~15	最高25.2°C 最低19.5°C
	12:00	快晴	南西	10~15	
	18:00	快晴	南南西	15~20	
1917年7月9日	6:00	快晴	無	0	最高22.6°C 最低16.3°C
	12:00	晴	北	4~6	
	18:00	霧	北東	0~4	
1917年7月10日	6:00	霧	無	0	最高23.0°C 最低16.3°C
	12:00	霧	南東	4~6	
	18:00	霧	南東	0~4	

おわりに

本稿では、徳富蘆花が1917年7月9日早朝、九十九里粟生海岸で目撃した「市女笠の容をした日の出」の記述と、実際に観測される上位蜃気楼による変形太陽の時間経過での変化とを比較し、蘆花が目撃したものが上位蜃気楼による変形太陽である蓋然性が高いことを示し

た。

写真と比較することにより蘆花日記の描写の的確さが際立つが、優れた観察眼の背景には「文学者にも科学は必要なり」という蘆花の科学尊重の考えがあった(中西1936)。この視点は日記をもとに著された短編「九十九里」にも引き継がれ、九十九里の大地と海・自然の美しさを称え、素朴な文化や人々の風情を鮮やかに描き、この地を避暑地・海水浴地として全国に知らせるに一役を買う、九十九里の記念碑的作品たらしめた。

『新春』や中西月華ら向上会の活動もあり、避暑地九十九里の海に誘われた文人は多い。彼らは紀行文や日記に九十九里の情景を書き残しているが、これらの記録から得られる情報は人々の生活や年中行事に留まらず、気候や生物相、自然環境など幅広い分野に及ぶ。本稿ではその一端を示し、今後、新たな蜃気楼の記述の発見を期待するものである。

現在、蘆花が過ごした茉莉舎は残っていないが、その旧跡から海岸に向かったあたりには1985年に建立された「文豪 徳富蘆花先生文学碑」が佇み、文人に愛された九十九里の歴史を伝えている。前述のとおり、九十九里浜は全国でも珍しい蜃気楼が見られる地域として知名度を増しつつあるが、これまで蘆花文学碑と蜃気楼は個々の『点』として地域観光における役割を担ってきた。本稿ではこれを繋ぐ『線』を示すことにより、文学と自然現象とが融合した地域資源として再価値化し、他地域にはない九十九里浜の新たな魅力を見出したことに大きな意義があると考えられる。

謝辞

変形太陽や蜃気楼については魚津埋没林博物館の佐藤真樹氏に、九十九里の向上会及び中西月華関連資料については渡邊善司氏にご教示をいただきました。伏して感謝申し上げます。

筆者のうち鈴木は、千葉県立中央博物館の市民研究員として本研究に参加しました。

引用文献

朝日新聞. 2018. 蜃気楼といえば九十九里? 2018年8月18日夕刊: p. 1.
大木淳一・武田康男. 2018. 2015年~2016年に千葉県九十九里浜で観測された上位蜃気楼. 千葉中央博自然誌研究報告 14(1): 29-40.
大木淳一. 2019. 千葉県九十九里浜で104年ぶりに再確認された上位蜃気楼の調査活動と今後の展望. 地学教育と科学運動 83: 3-9.
気象庁ホームページ. “過去の気象データ検索”. 国土交通省気象庁. https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/daily_s1.php?prec_no=45&block_no=47648&year=1917&month=7&day=9&view=a2 (最終閲覧日: 2025年10月30日)
齋藤 功. 1993. 地方文化史料の発掘. 千葉史学 22: 5-7.
鈴木敬三. 1995. 市女笠. 有職故実大辞典. pp. 34-35. 吉川弘文館, 東京.

- 鈴木久治 写. 1913-1915. 一遍聖繪 3, 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2591575> (最終閲覧日: 2025年10月30日)
- 中央气象台. 1917. 天気図 大正6年7月. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12896722> (最終閲覧日: 2025年10月30日)
- 徳富健次郎. 1918. 九十九里. 新春. pp. 349-460. 福永書店, 東京.
- 徳富蘆花. 1930. 六月十八日(466). 蘆花全集 第20巻. pp. 501-502. 新潮社, 東京.
- 徳富蘆花. 1986. 蘆花日記 5 (大正六年六月-大正六年十月). pp. 99-101. 筑摩書房, 東京.
- 富山県伏木測候所(編). 1919. 富山湾の蜃気楼. 153 pp. 伏木測候所, 富山.
- 中西月華. 1936. 九十九里と蘆花先生. 徳富蘆花: 検討と追想. pp. 307-312. 岩波書店, 東京.
- 日本蜃気楼協議会. 2016. 蜃気楼のすべて! 108 pp. 草思社, 東京.
- 毎日新聞千葉支局(編). 1973. 九十九里. pp. 103-105. 九十九里史料調査研究会, 千葉.

The Distorted Sun Observed by the Japanese Literary Master Roka Tokutomi on the Kujūkuri Coast, Chiba Prefecture

Kento Suzuki^{1), 2)*}・Jun'ichi Ohki³⁾・Tomoki Yamaguchi²⁾

¹⁾Citizen Researcher of the Natural History Museum and Institute, Chiba.
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan

²⁾Cultural Promotion Division, Sports and Culture Bureau, Environmental and Community Affairs Department, Chiba Prefectural Government
1-1 Ichiba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8667, Japan

³⁾National Museum of Japanese History
117 Jonai-cho, Sakura 285-8502, Japan

*E-mail: k.szk529@pref.chiba.lg.jp

In the summer of 1917, the Japanese literary master Roka Tokutomi spent a month in Ao, Kujūkuri Town, Chiba Prefecture. In his essay “Kujūkuri,” published the following year, he described witnessing a sunrise over the sea at Kujūkuri that resembled an “*ichimegasa*”. The authors interpreted this as a distorted sun observable at Kujūkuri Beach and discovered more detailed descriptions in Roka's diary from that period. A comparison of the diary entries with modern data from observations of distorted suns caused by superior mirages revealed no inconsistencies, strongly suggesting that the sunrise Roka observed was likely an superior mirage.